

30

中国佚書『医学全書』と日本古医籍による引用文

郭 秀梅

順天堂大学医学部 医史学研究室／北里大学東医研 医史学研究所

『万安方』の活字化作業中、引用された中国の『医学全書』（『全書』とも）に興味をおぼえた。中国の歴代書目は「～全書」という医書を明代以後から著録するが、『万安方』が成立した1327年ごろの南宋以前に本書名は見あたらない。中国医学文献にも関連資料は見いだせなかった。ただし真柳誠氏の「中国医籍記録年代総目録（十六世紀以前）」（吉田忠・深瀬泰旦『東と西の医療文化』所載，2001）に唯一の手がかりがあり、「医学全書（*一三〇四頓医，*一三二七万安，*一三六三福田，一四五四撮壤，*一四九一太一，一六〇〇慶長五）」とある。そこで、さらに詳しく考察してみた。

そもそも医学全書とは『医心方』を日本最古の医学全書とよぶごとく、医学の全分野を収録した書という。あるいは明・万全の医書10種を収録した『万密斎医学全書』のごとく、いわゆる叢書についても全書と称する場合がある。『万安方』にある『医学全書』の佚文からすると医学全般を包括しているようで、内容・書名ともに医学全書といえよう。以下、日本の古医籍に引用された『医学全書』の佚文例から、本書の性格を検討してみたい。

『頓医抄』麝香円。左ノ脇下ニ杯ヲウツフセタルカ如シ。頭足アツテ久不愈。痰喉ニツマリ瘡病ヲ作シテ咳嗽、其脈濡結ナルヲ治ス。是ヲ肥氣ト号ク。

『万安方』（20回、うち『全書』15回）巻1：『三因』『百一』『事証』『全書』等諸方或曰、昔京師僉山人、専売此薬有名。但人多不得其真方、故服之無効。唯此八味、最其真者。其他加人參・附子・五加皮・大腹皮等者、皆偽方也。此本出『千金翼』、名紫蘇子湯。巻1：調気圓『全書』。疎風順気、流注血脈、舒暢筋絡。凡是風中氣中、先用此調気、次用治風薬、無不効驗、終不為廢人。此方乃厯安常所製也。巻50奥書：性全云、又『医学全書』十卷。第一卷則出医家及第云、第一登科則明堂針灸、第二科則診脈、第三科則運氣也。是則『素問』『太素』之妙規、黄帝・伯翁之神術矣。今依『三因方』略説而抄之、易簡而甚詳、記之記之。

『福田方』（2回）巻九児脈：『医学全書』云、予医ヲ行シヨリ三十余年、頻試ニ驗之。

『撮壤集』と『慶長五年本節用集』医方類：『医学全書』の書名を記すのみ。

『太一統稿』（1回）木部下品・草菓：『本草』不出、然製法不見。『医学全書』曰、麩裏、煨ストアリ。又神授必瘥散ニ不去皮用ト、可依方。当時ハタダ去皮炒用也。

以上の佚文から『医学全書』の性格がある程度推定できる。本書は全10巻だった。著者未詳だが、30余年の臨床経験がある。『頓医抄』以降の各書に引用がみえるため、おそらく『活人事証方』『三因方』と同じく南宋ごろに出版されたであろう。また北宋の厯安常に言及するため、南宋の医家に間違いはない。内容は医師の試験や基礎医学・本草および臨床各科などの医学全般に及ぶ。しかし10巻ならば各巻の内容は少なく、詳細ではなかっただろう。したがって広く流布せず、再版されることもなく、ついに佚書となったと思われる。

なお今回の『太一統稿』の調査では新発見も得られた。その第1は『太一統稿』にあった中国佚書『可用方』の佚文で、当文は『可用方』を大量に引用する『万安方』にみえない。すると『太一統稿』が成立した1491年ごろ、『可用方』はなお伝存して参照されていたと分かる。

第2は『太一統稿』に見いだされた『万安方』巻十八、紅員（圓，円）子……の記述だった。現『万安方』は巻18積聚・疝癖・黄疸の本文を欠巻しているからである。『太一統稿』のわずかな記載ではあるが、これより『万安方』巻18は1491年ごろまだ伝存していたことが裏付けられた。